

# 陵墓伝承地の変遷と明治期の古墳保存行政

—— 仲哀天皇陵上原伝承地を例にして ——

尾 谷 雅比古

## はじめに

古墳は、考古学資料あるいは埋蔵文化財の中でも、一般的には視覚的にだれでも見ることができるものであり、日常的に接しえるものでもある。その結果、市民にとって地域史を捉える中での学習活動における学習資源として身近なものである。また、地域景観の重要な要素となっているものも多くあり、その破壊に対し保存運動が展開される例も多い。もちろん、このような考古学資料や埋蔵文化財という見方は近代以降のものである。

一方で、近代科学が成立する以前から、「塚」や「××媛の墓」「天皇の御陵」などと言い伝えられ、信仰や崇敬あるいは名所、旧蹟の対象になっていたのも古墳である。このような古墳については、数多くの言い伝えが古墳所在の地域に伝承されており、地域住民にとっては身近なものであった。しかし、古墳は、天皇の陵墓あるいはその可能性を内包しているものであることから、政治的支配関係において重要な鍵となるものであった。特に近世では、幕府と朝廷における関係、また、明治政府にとっては、近代天皇制国家の確立と体制強化にとって重要なものであった。

その古墳の取り扱いについて、近世から近代にかけての陵墓伝承地である大阪府河内長野市上原に所在する仲哀天皇陵伝承地を取り上げ、地域資料である上原区有文書<sup>①</sup>からその変遷過程を明らかにする。そして、陵墓であることを最終的に否定された陵墓伝承地の動向を見ることにより、近代における

古墳保存行政の一端を明らかにしたい。

尚、江戸時代の陵墓伝承地については河内長野市史<sup>①</sup>の成果を一部引用する。

## I、上原仲哀天皇陵伝承地の状況

当該陵墓伝承地が所在する河内長野市は大阪府の南東部に位置し、その中央を大和川の支流石川が北流する。石川は、河内長野市の南側に連なる和泉葛城山系に源を発し急峻な河谷を形成しながら山間部を流れ、河内長野市高向付近から河岸段丘を形成する。河岸段丘は石川左岸に約4km、幅800～1000mの細長い台地上の地形をなしている。このことから、付近の総称として「長野」の地名が生れたと考えられる。

この河岸段丘上を石川と並行するように南の和泉方面に向かう旧街道が通じており、街道に面したその野作地区に安政3年（1856）に建てられた「仲哀天皇御廟」の石柱がある。この石柱が、西側約350mの丘陵上に位置する第14代仲哀天皇の陵墓とされた場所への案内碑である。

現在、仲哀天皇陵は天皇在位の真否は別にして、幕末に藤井寺市の前方後円墳である岡ミサンザイ古墳が比定されている。しかし、現在の場所に治定



写1「仲哀天皇御廟」

されるまでは、河内長野市の上原の地が陵墓と認識されていた時期があり、この石柱もその認識のもとに建設された。

## II、江戸時代の陵墓伝承

### 1、陵墓としての治定

この陵墓伝承地は、現在のところ考古学上、古墳であるかいなかの検証はなされていない。当該地の現況は、送電線の鉄塔が古くから建てられて

①『河内長野市史第八巻資料編五』河内長野市 1981年

② 上田宏範「学史からみた上原陵墓伝承地」『河内長野市史第1巻上本文編考古』1994年

おり、発掘調査等の確認調査も実施されておらず、埴輪等の遺物も表面採取では発見されていない。しかし、一般的には、高さ約16mの円墳で、周囲は約200mの古墳と説明されている。この数字は『大阪府全誌』巻之四<sup>③</sup>に記載されている下記の当該地の説明を引用したものと思われる。

西北なる西山の中に荒塚あり、封土の高さ五丈四尺・周囲壱百拾間・面積八百四坪にして、上に十三層<sup>④</sup>の石塔あり、里人伝へて仲哀天皇の御陵なりと...後略

すなわち高さ五丈四尺は約16.4m、周囲壱百拾間は約199.9mの数字をあてはめることができるからである。

しかし、いずれにしても塚すなわち古墳として認識されるだけの形状が、『大阪府全誌』作成時期には確認できたと考えられる。

この陵墓伝承地が、いつ頃から仲哀天皇陵として認識され変遷していったのであろうか。

江戸時代の地誌類の中で延宝7年(1679)の『河内鑑名所記』<sup>⑤</sup>に陵墓伝承

地の状況を見ることができる。「上原村」の項では「上原仲哀天皇御廟 社、拝殿、石段、石の鳥居有」とある。図には、該当地と思われる場所に鳥居そしてマウンド状の小山が描かれており「御廟」と注記がされている。また、本社、拝殿、八幡宮、石段、鳥居も描かれている。後述する元禄期の十三重の層塔や石塔は描かれていない。ただ、この時期にはすでに「御廟」の前に鳥居が建てられている。



図1 河内鑑名所記

江戸時代前期の歴史学者松下見林<sup>⑥</sup>は元禄11年

③ 井上正雄『大阪府全志』大阪府全志発行所 1922年(大正11)

④ 記録によって十二層と記録されているが十三層の層塔と考えられる。

⑤ 三田浄久『河内鑑名所記』延宝7年(1679)刊

⑥ 1637年～1703年

(1698)に『前王廟陵記』を著わし、その中で仲哀天皇陵について次のように記載している。

恵我長野西陵 穴門豊浦宮御宇仲哀天皇 在河内国志紀郡 兆域東西二  
丁 南北二町  
陵戸一烟 守戸四烟  
或曰 西陵 今在上原村

『延喜式』を引いた後、西陵は現在の河内長野市上原である上原村にあるとしている。しかし、恵我長野西陵の所在地が『延喜式』では志紀郡であるのに対し上原村は錦部郡に属する。

この元禄期、国学、勤皇思想の勃興を背景に、細井知慎<sup>⑦</sup>の柳沢吉保への建議により、幕府は元禄10年(1697)に陵墓探索を実施し、神武天皇から後花園天皇までの78陵を明らかにした。また、66陵の修理・垣根設置を各領主や代官に命じて行わせている。この時、仲哀天皇陵の場所について『徳川実記』によれば、「河内国志紀郡恵我長野の西。今の錦部郡長野庄上原村なり。」としている<sup>⑧</sup>。これが、幕府及び朝廷による最初の陵墓としての取り扱いであった。また、細井知慎の『諸陵周垣成就記』<sup>⑨</sup>は、この幕府探索と垣設置事業の報告であるが、やはりここでも「錦部郡長野庄上原村陵之有候」と記載されている。

更に、当該地の上原に残されている区有文書の中に元禄14年(1701)6月の『上原村明細帳』があり、この元禄期に実施された幕府探索と垣根設置についての村方の記録が残されている。明細帳の記載は「一 氏神 仲哀天皇宮」として敷地境内面積、「一 仲哀天皇宮内陣」として祭紳として五鉢竜王・仲哀天皇・神功皇后、「一 社」として規模などが記載されている。それに引き続き「一 陵」として以下の記載がある。

---

⑦ 細井広沢 諱が知慎 万治元年(1658)~享保20年(1735)

⑧ 茂木雅博「江戸時代の天皇陵」『日本史の中の古代天皇陵』慶友社 2002年

⑨ 『諸陵周垣成就記』元禄11年(1698)

一 陵 高サ九間、惣廻り百拾間、石塔 高サ貳尺、幅八寸

御遺骸筑紫檀月宮より長門穴門二送り、豊浦之宮より此所江棺槨を奉葬ト申伝候、元禄十一寅年従 御公儀様、竹垣為仰付、大坂寺社役関根庄右衛門殿・三国市右衛門殿、其外下役之同心四人・大工貳人二而、御普請請被為遊候、竹垣高サ五尺八寸・幅三間・横三間壹尺、

これによれば、元禄11年（1698）に大坂町奉行所与力関根庄右衛門・三国市右衛門の指揮の下に、高さ約1.75m、幅5.4m、横5.7mの竹垣が巡らされたことがわかる。

上記に続き陵の付帯施設として読み取れる記載で茅葺の拝殿、経蔵、石鳥居、石灯籠、十三層の石塔、石雁木そして末社として八幡宮などがある。

## 2. 仲哀天皇陵説の否定

ところが元禄期の竹垣設置から約40年を経た享保20年（1735）の「河内志」『日本輿地通志畿内部』<sup>⑩</sup>では、上原村の仲哀天皇陵は「高向王墓」と記載されている。更に享和元年（1801）秋里籬島の『河内名所図会』でも高向王墓の項に「上原八幡の側にあり世にこれを仲哀天皇陵といへるは謬りならん」と

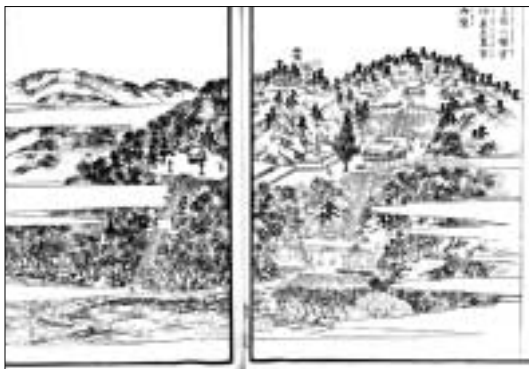


図2 西国三十三所名所図会

して仲哀天皇陵を否定して記載されている。つまり、どちらの地誌も用明天皇孫で皇極天皇の前夫「高向王」の墓であるとしているのである。図2の嘉永元年（1848）の『西国三十三所名所図会』<sup>⑪</sup>では、

<sup>⑩</sup> 関祖衡、並河永『日本輿地通志畿内部』享保20年（1735）

<sup>⑪</sup> 暁鐘成『西国三十三所名所図会』嘉永元年（1848）

上原八幡宮、仲哀天皇宮、御陵が併記されている。描かれた境内図には、向かって左手に石段と「八幡宮」その上に「御陵」と竹垣を巡らした古墳らしきものが描かれている。その右側には「宝庫」と鳥居、石段の上に茅葺きの拝殿と十三重の層塔、更に石段、石垣、玉垣が描かれ「仲哀天皇」の社が描かれている。仲哀天皇陵の説明では、制札が掲げられており、それには「此陵之地」とし、猥に立ち入ることを禁じ掃除を申しつけ、年貢は免租地であることが書かれていると、記されている。そして、この図会でも仲哀天皇陵ではなく正しくは「高向王」の墓であるとしている。

これら地誌類以外では、当時の陵墓研究家による著作類の中で、文化5年(1808)の蒲生君平の『山陵志』によると、仲哀天皇陵は現藤井寺市の仲津山古墳としている。また、幕末の慶応2年(1866)に刊行された平塚瓢斎の『聖蹟図志』では「仲哀天皇恵我長野西陵 此陵山岡村二属 字ミサンサイト云」とあり、現在の仲哀天皇陵の治定地をあげている。そして、上原の当該地は「仲哀天皇社 全陵 或云高向王墓」と図上に描かれている。また、同じ平塚瓢斎が著わした同年刊行の『陵墓一隅抄』でも「岡村管内字美左武左伊」としている。そして、同本の後半に列挙されている皇子、皇女等の墓の中に以下の記載がある。

用明孫 皇極前夫 高向皇子 長野墓 世称仲哀陵然一封円塚河内志以為  
皇子墓是矣

在河内国錦部郡長野庄上原村字宮山傍在仲哀天皇及八幡  
社或云此地高向庄之内也

平塚瓢斎は、上原の仲哀天皇陵を否定する一方で高向王墓を陵墓としてあげている。

では、なぜ高向王墓説が浮上したのであろうか。その理由は、『河内名所図会』や『西国三十三所名所図会』の説明文の中に読み取ることができる。まず、上原の仲哀天皇陵が前方後円形の形、周壕をもたないなど山陵の地相をしめしていないということを理由としている。そして、高向王墓とされるのはこの地域が中世、高向庄の地域内であることをあげている。現在の行政区画

では上原に隣接するところが高向であり、『住吉大社神代記』<sup>⑫</sup>の中にも高向の地名があることなどから、地名をもとに高向王墓説が生れてきたのであろう。

もっとも当該地が仲哀天皇陵として明確に否定される理由は、この地が前述したように錦部郡であり、延喜式記載が志紀郡であることである。同じ河内国とはいえ、南端にあたる錦部郡と中央に近い志紀郡とでは距離的に離れすぎている。

### 3、幕末の陵墓探索

幕末になると、前述のように上原の仲哀天皇陵は否定されていった。しかし、宇都宮藩主戸田越前守忠恕の建白による所謂『文久の修陵』においては、否定的見解が大勢を占めている中で仲哀天皇陵として、この地にも山陵方の巡検が入った。それについては、上原区有文書に明治4年(1871)5月の「御陵書上帳」に記載がある。

右従往古 仲哀天皇御陵与申伝 旧幕府之比折々御見分有之 竹垣可仕  
様被仰付修補仕罷在、猶去ル文久式年戌十一月廿六日戸田和三郎様御見  
分二相成 追而御沙汰可相成旨被仰聞 未其儘二御座候 右之外 除地  
田畑並古老之遺説等無御座候... (以下略)

この時の見分は、山陵奉行である宇都宮藩家老戸田忠至ら一行によるものである。彼らは文久2年(1862)11月7日から1ヵ月ほど大和から河内、和泉、摂津を巡検した。その行程で、同年11月26日は、上ノ太子(現南河内郡太子町)及び観心寺御廟(現河内長野市寺元、観心寺境内後村上天皇陵)を回り、狭山新町(現大阪狭山市)に宿泊していることから、観心寺から狭山新町に向かう途中で立ち寄り、見分したようである<sup>⑬</sup>。

やはり、「文久の修陵」が陵墓の比定・造営の目的であることから、元禄期の山陵探索で陵墓として取り扱った上原の当該地を仲哀天皇陵の比定地候補

---

<sup>⑫</sup> 「天野。横山。錦織。石川・葛城。音穂。高向。華林。二上山等一。」『住吉大社神代記』住吉大社蔵

<sup>⑬</sup> 「御廟山一条古記等手控書(二)」『羽曳野市史第5巻史料編三』羽曳野市 1983年

として見分したのであろう。しかし、見分の結果については村方に「追而御沙汰可相成旨被仰聞、未其儘ニ御座候」と何も沙汰がなかった。そして、元治元年（1864）5月から翌年2月にかけて岡ミサンザイ古墳（現藤井寺市）を仲哀天皇陵として修陵している<sup>⑭</sup>。つまり、この時点で上原の仲哀天皇陵は公に否定されたことになる<sup>⑮</sup>。

### Ⅲ、近代の古墳と仲哀天皇宮（社）

#### 1、陵墓伝承地と神社

陵墓伝承地は、江戸時代に確認できる資料から見る限り、仲哀天皇宮（社）八幡宮の神社施設が伴っている。

資料的には、前述の延宝7年（1679）の『河内鑑名所記』<sup>⑯</sup>に状況を見ることができる。麓に鳥居、石の階段、そして階段を上りきったところに拝殿、その奥に本社、本社の左手に八幡宮、そしてその奥に鳥居そして「御廟」が描かれている。本社と記載されているのは仲哀天皇宮であろう。これを見る限り、本社や八幡宮は、仲哀天皇御廟の構成要素と捉えられる。

これが、元禄期の村明細には氏神として仲哀天皇と神功皇后、五体竜王を祭神とする仲哀天皇宮、陵そして一字落ちで記載されている拝殿、経蔵、石鳥居、石灯籠、十三重の石塔、末社八幡宮、蓮池等が記載されている。また、この資料からは、仲哀天皇宮の社殿の修理、拝殿、経蔵、石鳥居、石灯籠の設置などが領主によって寛文10年（1670）になされたことがわかる。この時期に陵墓伝承地及び神社域が最初に整備されたようである。

この状況は、後の『西国三十三所名所図会』の図によってもわかる。そして、享保期の『河内鑑名所記』の図とくらべると八幡宮前にも石の階段が設置され、図のタイトルも「上原八幡宮 仲哀天皇宮 御陵」となっている。つま

---

<sup>⑭</sup> 外池昇「村落と陵墓」『幕末・明治期の陵墓』吉川弘文館 1997年

<sup>⑮</sup> 『陵墓録』（国立公文書館蔵）によれば、河内国丹南郡岡村所在仲哀天皇恵我長野西陵の治定日は維新前と記されている。

<sup>⑯</sup> 三田浄久『河内鑑名所記』延宝7年（1679）刊



り、末社であった八幡宮が仲哀天皇宮と対等に併記されているのである。

## 2. 西山神社と陵墓伝承地

明治維新後の近代神社制度の成立とともに陵墓地よりも神社域が整備され、当地は西山神社となり社格が村社とされた。前述の上原区有文書の明治4年(1871)「御陵書上帳」にも仲哀天皇社と八幡宮、そして陵の記載がある。

元禄期とは違い、八幡宮と仲哀天皇社とが同格の取り扱いがなされ、それぞれ独立して記載されている。また、「陵」は下記のように仲哀天皇社と八幡宮の「境内」に位置すると記載されている。

右境内

一 陵 高九間 廻百拾間。

内

石塔壱基 高式尺 文字不分

別紙図面之通

但、左右二義宝珠躰之物有り

十二重石之塔壱基 高壱丈壱尺、巾式尺式寸

木鳥居 高七尺 巾四尺五寸

記載上からみれば、「陵」が神社に取り込まれた感がある。「陵」には被葬者名をつけず単に「陵」とし、この時点でも延宝期には建てられていた木製鳥居と元禄期には建てられていた十三層の石塔が付属していることがわかる。しかし、この時期においては、まだ、西山神社の名称は使用されていない。

西山神社の名称は、上原区有文書にある1873年(明治6)2月の「神社取調書上帳」の記載が初見である。そこには「祭神 仲哀天皇」と「末社 八幡宮」、「御陵 壱ヶ所」が記載されている。その後、「明治七年四月五日改二成ル 河内国第廿六区錦部郡上原村 産子三ヶ村 戸数百四十一軒」で始まる資料で、はじめて「式外村社 西山神社」の社格<sup>⑩</sup>が使われている。これらの資料によれば、上原村と隣接する惣作村、野村を氏子区域とする神社であ

---

<sup>⑩</sup> 太政官達 郷社定則 明治4年(1871)7月4日

る。祭神は仲哀天皇とし、神功皇后、武内宿禰そして1872年（明治5）に合祀された須佐之男命と一緒に祀られ、摂社として八幡神が祀られている。この時点で、一時「上原八幡宮」として呼ばれていた八幡宮が、西山神社となってから摂社の扱いになった。

### 3. 境内地と陵墓伝承地

近代神社の敷地は、社寺領上知令<sup>⑧</sup>による「現在ノ境内」とその他の旧境内地（従前の境内）である境外地に分類される。西山神社では、1874年（明治7）4月の取調絵図で、旧境内900坪で、境内地153坪、境外地747坪とし、境内地には陵墓伝承地である「陵地」が含まれている。ところが、明治9年5月の「堺縣地租改正掛」に提出した取調書には「旧境内地壹町貳反貳拾九歩

内訳 現境内此反別五畝拾八歩 境外山林反別壹町壹反五畝拾一步」とし、この境外地には「貳反八畝歩 高向王墓有之」とある。明治7年の「陵地」に相当する「高向王墓」が境内地から外されたのである。このことは、地租改正に伴う1874年11月7日太政官布告第120号による地所名称区別改定による地種によれば、現境内地が官有地第1種であり、境外地は上知となっていることから官有地第3種となる<sup>⑨</sup>。つまり官有地第1種は「神地 伊勢神宮山陵官国弊社府県社及ヒ民有ニアラサル社地ヲ云」とあり、山陵すなわち陵墓は官有地第1種に区分されることから、地所区別上は陵墓伝承地を陵墓としては否定している。

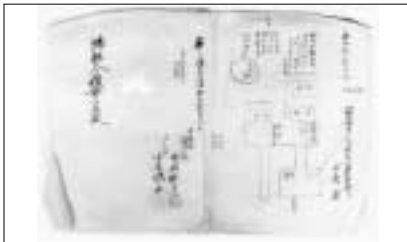


図3 明治9年西山神社取調絵図

そして、1879年（明治12）12月の「河内国錦部郡上原村西山神社明細帳」では「堺県管下河内国錦部郡上原村字西山 村社 西山神社」について、以下の記載がある。

<sup>⑧</sup> 太政官布告第四号 明治4年（1871年）正月5日

<sup>⑨</sup> 大竹秀男「近代土地所有権の形成」『日本近代化の研究 上』東京大学出版会 1972年

## 陵墓伝承地の変遷と明治期の古墳保存行政

- ― 祭神                    仲哀天皇   素戔鳴尊   神功皇后   高良明神
- ― 由緒                    不詳
- ― 社殿間数                梁行七尺   桁行八尺四寸
- ― 境内坪数                百六拾八坪                    官有地
- ― 境内坪数                三千四百六拾壹坪           同   断  
マ  
内

### 八百四拾坪   高向王塚

官有地第1種として境内地と官有地第3種となる境外地とが区分され、境外地に含まれる「高向王墓」は山林と同様の扱いをうけることとなり、後述するように払い下げされ<sup>①</sup>売却あるいは開墾されることの道を開いた。

#### 4、高向王墓

江戸時代中期以降からあった陵墓伝承地の「高向王墓」説は、明治期に入り一旦資料上ではあらわれなかったが、教部省<sup>②</sup>から1875年（明治8）11月28日付の堺県宛の「書面之趣別紙達書之通相心得事」<sup>③</sup>として別紙達書「其県内獅子窟寺以下九ヶ所陵墓ノ義、別紙之通相心得事此旨相達候事」の達に登場する。ここでは堺県内の九ヶ所の陵墓について陵墓の可否と墓掌及び墓丁の設置について指示している。しかし、そのうち「上原村   高向王墓、田口村 田口氏墓、小倉村   田口氏墓」の3ヶ所は陵墓としては否定していないが、墓掌及び墓丁の設置については不要としている。そして、「地所保有ノ義八内務省へ可伺出候事」としていることから、陵墓としては、完全には否定していないが曖昧である。更に土地の管理についても、地所区別は明確に示されず、内務省と協議するように指示している。つまり、教部省としては陵墓の可否について判断しがたいものとして取り扱っている。しかし、翌年の1876

---

<sup>①</sup> 1901年（明治34）4月   上地林を西山神社が特売を受ける。「河内長野市内所在」抜粋複写版『大阪府神社財産調明細』1879年（明治12）

「国有林土地森林原野下戻法」1889年（明治32）4月17日   法律第99号

<sup>②</sup> 「教部省諸陵事務ヲ掌ル」『第六類大政類典』国立公文書館

<sup>③</sup> 山中永之佑「堺県公文録（四）」『堺研究   第8号』堺市立中央図書館   1982年

年（明治9）の戸長から堺県令宛の西山神社境内図でも「高向王墓」と図示されている。これ以後も、神社取調書類や陵墓取調書類関係に「高向王墓（塚）」が名称として使われた。

この「高向王墓（塚）」あるいは「陵」とされているものに対する調査は何度か政府により実施された。1873年（明治6）の上原区有文書には、4月付の堺県令宛の「御陵取調書」が残されている。そこでは「仲哀天皇社境内」に「御陵」が所在することが記載されている。また、1878年（明治11）には宮内省書記官他1名が堺県職員とともに巡拝している。また、明治13年1月30日付の「西山神社古墳墓」と題し「高向王塚」と記した絵図には陵墓伝承地と鳥居、十三重層塔が描かれ、「堺縣橋本三寶殿 御改二相成候 控」の記載がある。このことは、「高向王塚」として見分したものである。

つまり、仲哀天皇陵説は否定され、前述のように土地区別上は陵墓の取り扱いとはなされていないが、「高向王墓」説が残っている限りこの場所が陵墓か否かの判断が定まらない状況が続いていたようである。

#### 5、合祀と古墳

1906年（明治39）4月28日の勅令第96号「府県社以下神社ノ神饌ノ幣帛料供進ニ関スル件」及び同年8月9日勅令第220号「神社寺院仏堂合併跡地ノ譲与ニ関スル件」が公布され、神社合併が進められた。神社合併は、神社の国家管理を進めるためのもので、特に大阪府は合祀<sup>23</sup>が強行された地域の一つで、1914年（大正3）には約63%の神社が合祀された。河内長野市内では34社が12社となっている<sup>24</sup>。

この時、西山神社も合祀対象となり、1908年（明治41）2月13日に現河内長野市原町に所在した菅原神社、同古野町に所在した浦野神社とともに同西代町にある現在の西代神社に合祀された。

祭神が西代神社に合祀となったため、陵墓伝承地と山林、境内跡地が上原

---

<sup>23</sup> 「神社合併整理ニ関スル件」大阪府訓令第24号『大阪府広報 号外』1907年（明治40）11月6日

<sup>24</sup> 籠谷次郎「明治後期の教育と文化」『河内長野市史第三巻 本文編近現代』2004年

に残った。この陵墓伝承地を含む旧神社域の内、山林と陵墓伝承地合わせて3461坪について1909年（明治42）1月23日付で大阪府から売却の許可を得た。これらの土地は、上地されていたものを1901年（明治34）2月に特売を受けたものである。一方、境内地168坪は勅令第220号「神社寺院仏堂合併跡地ノ譲与ニ関スル件」のとおり、そのまま1909年12月17日付で西代神社に無償譲与された<sup>25)</sup>。これらの資産について西代神社は、旧西山神社の建物一切を処分して旧西山神社の負債を処理し、土地を処分して西代神社の資産に加えようとした。

この合祀から、4年後の1912年（明治45）2月5日付で、西代神社社掌北居文之祐から大阪府知事犬塚勝太郎宛「古墳墓二係ル伺書」<sup>26)</sup>が上申された。

西神乙第壹號

古墳墓二係ル伺書

大坂府南河内郡長野町大字上原村元村社西山神社八明治四十一年二月十三日大坂府指令社甲二 三號ヲ以テ全町大字西代村社西代神社二合祀ノ御許可ヲ得候二就テ八右廢社西山神社跡地八明治四十二年一月二十三日大坂府指令第一四一四号ヲ以テ賣却ノ許可ヲ得候二付全地所ヲ賣却ノ登記申請ヲナサントスルニ當リ更ニ該地所ヲ檢分仕リ候處其境外地ニ形古墳ニ似タル所有之候二付地方老年者ノ口碑傳説其他二付取調候處別紙調書之通りニ御座候得共何レモ甚ダ漠然タルモノニシテ確カナル根拠モ無之様相信シ申候二付、売却開墾等差支ヘ無之候哉至急何分ノ御指令相仰ギ申度、此段及御伺候也

明治四十五年貳月五日

大阪府南河内郡長野町

村社西代神社々掌

北居文之祐

<sup>25)</sup> 「河内長野市内所在」抜粋複写版『大阪府神社財産調明細』1879年（明治12）

<sup>26)</sup> 「自大正二年至大正五年 官祭招魂社及墳墓 第11号古墳墓二係ル伺書」『陵墓関係大阪府廳文書 御陵墓願伺届 七』宮内庁書陵部 1935年（昭和10）写

大阪府知事 犬塚勝太郎殿

伺書には「元西山神社境外地古墳墓二係ル調書」が添付されており、従来からの地域に残されている村方文書や地誌類などに記載されている仲哀天皇陵墓や高向王墓説が列挙されている。

その内容は、廃社西山神社跡地を前述の1909年（明治42）1月23日付で大阪府から許可を得て売却のために登記申請しようとしたが、境外地に古墳状のものがある。これについて口碑伝説を調べたが漠然としているとのことである。

では、なぜ西代神社がこの古墳の存在について大阪府に照会をかけたのであろうか。それは『現行 神社法規』<sup>⑦</sup>にもあげられている1874年（明治7）の太政官第59号達「古墳地発掘ノ禁止ニ関スル件」<sup>⑧</sup>の存在である。

#### IV、古墳保存行政

##### 1、古墳保存行政の形成期

明治維新の後、近代天皇制国家の確立をめざす政府は、まず天皇制の国民への浸透と列国との条約改正をすすめるべく、国家権威としての天皇を具現化すべく施策がすすめられた。

それが「神武天皇」以来の「万世一系」の天皇系譜の創作であった。そして、そこに必要なのは「万世一系」を具現化する歴代天皇陵の治定と皇后、皇子、皇女など天皇系譜上必要な陵墓の治定であった。

そこで「顯宗天皇山陵始メ十三陵、皇后以下二至テ八神武天皇皇后媛踏鞬五十鈴媛命御陵ヲ始メ実ニ夥敷事ニテ」という状況の中で、歴代陵墓の調査、治定と整備、祭祀などを行う陵墓行政として、古墳保存の行政がなされた。古墳には陵墓に治定された陵墓古墳とそれ以外の古墳とが存在する。陵墓古墳以外では宮内省から「陵墓ノ徴証ヲ認メス」と決定された非陵墓古墳、ど

---

<sup>⑦</sup> 皇典講究所編纂、『現行 神社法規』皇典講究所 1907年（明治40）

<sup>⑧</sup> 『公文録』1874年（明治7）4月27日 国立公文書館

ちらとも決定されていない未選別古墳とが行政上存在し、この未選別の古墳から陵墓を選別するため、古墳保存に関する行政措置が執られたのである<sup>②</sup>。

政府は未治定の陵墓を調査し治定するために陵墓として条件が整った墳墓を多くの古墳から選別抽出しなければならなかった。そのためには、沖縄・北海道を除く全国各地の古墳の現状保存と情報収集の必要性が生じた。そして、当時の陵墓を主管していた教部省は、1874年（明治7）4月27日付で教部大輔穴戸璣の名前で太政大臣三条実美宛、「古墳墓保存之儀二付伺」<sup>③</sup>を提出し、同年5月2日付で下記の太政官達（以下「太政官達第59号」と略す。）<sup>④</sup>が府県宛に通達された。

第五十九号

府 県

上世以来御陵墓ノ所在未定ノ分即今取調中二付各管内荒蕪地開墾ノ節口碑流传ノ場所ハ勿論其他古墳ト相見ヘ候地ハ猥ニ発掘為致間敷候若シ差向墾闢ノ地ニ有之分ハ絵図面相副教部省ヘ可伺出此旨相達候事

太政大臣三条実美

ここで明らかなのは、未定陵墓確定のための考証作業の必要性から、古墳の陵墓伝承地や古墳の発掘を禁止していることである。

また、1880年（明治13）11月15日に宮内省達乙第3号「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」（以下「宮内省達乙第3号」と略す。）が府県に通達された。

上世以来御陵墓ノ所在未定ノ分即今取調中二付云々ノ件去ル七年五月第五十九号ヲ以テ公達ノ趣有之就テハ古墳ト相見候地ハ人民私有地タリトモ猥ニ発掘不致筈二候ヘトモ自然風雨等ノ為メ石槨土器等露出シ又ハ開墾中不図古墳ニ掘当リ候様ノ次第有之候ハ口碑流传ノ有無ニ不拘凡テ詳

<sup>②</sup> 拙稿「制度としての近代古墳保存行政の成立」『桃山学院大学総合研究所紀要』第33巻3号 2008年

<sup>③</sup> <sup>④</sup> に同じ。

<sup>⑤</sup> 法令全書

細ナル絵図面ヲ製シ其地名並近傍ノ字等ヲモ取調当省ヘ可申出此旨相達候事

太政官達第59号では示されなかった私有地での古墳発掘の禁止と古墳の不時発見における宮内省への上申などの手続き等があらためて示された。

更に1897年（明治30）に貴族院からの「功臣元勳碩学鴻儒等ノ古墳墓保護の建議」にはじまり、1899年（明治32）に同じく貴族院から天皇陵古墳以外の皇后皇子皇孫墓の可能性ある古墳を保護するように「古墳墓保護」の建議が出された。この建議に対応するかのように明治34年に内務省警保局長から庁府県長官宛「古墳発掘手続ノ件依命通牒」<sup>②</sup>が以下の内容で通牒されている。

古墳又ハ古墳ト認ムベキ個所ヲ発掘セントスルモノアルトキハ其土地ノ官民有ニ拘ラズ予メ詳細ノ図面ヲ添ヘ宮内省ヘ打合可相成右ハ明治七年太政官達第五十九号明治十三年宮内省達乙第三号ノ趣モ有之候ニ付依命念及通牒候也

これは、1874年（明治7）の太政官達第59号や1880年（明治13）の宮内省達乙第3号の遵守を履行するように、内務省の地方行政、警察行政の面から指導する内容である。この後も、1874年の太政官達や1880年の宮内省達による手続きを励行するように内務省訓令や内務省警保局からの通牒が出されるに至った。

このような中、民間において1900年（明治33）に「歴朝聖皇の皇居山陵、王公名士の墳墓遺跡等」の保存顕彰を目的に公爵九条道孝、伯爵土方久元を中心に帝国古蹟調査会が設立された。また1911年（明治44）には史蹟史樹保存茶話会から発展した徳川頼倫を会長とする史蹟名勝天然紀念物保存協会<sup>③</sup>が設立され、史蹟名勝天然紀念物保存法の制定とその後の同法による行政に大きな影響力をもった。

---

② 内甲第十七号 明治三十四年五月三日 内務省総務局地理課長大谷靖、内務省警保局長田中貴道 庁府県長官宛7 国立公文書館蔵 1901年

③ 「故徳川公爵保存事業年表」『史蹟名勝天然紀念物』1-5 史蹟名勝天然紀念物保存協会 1926年



同年、時の帝国議会で貴族院議員徳川頼倫により「史蹟名勝天然紀念物保存儀」が建議され可決されると、それに応えるように内務省は訓令あるいは大臣訓示の中で、史蹟の保存について示した。1919年（大正8）には史蹟名勝天然紀念物保存法が施行され、このことにより、いわゆる非陵墓古墳や未選別古墳の中で、大型の古墳や壁画等が描かれた古墳は史蹟として指定され、保存されていった。これ以後、宮内省による陵墓行政としての古墳保存と内務省による史蹟行政による古墳保存との二面行政が実施されていく。しかし、古墳の発掘、遺物の収蔵等における宮内省優位は歴然としていた。

## 2、陵墓伝承地の処分手続き

この政府の施策の中で、神社が陵墓伝承のある「古墳二似タル所」を売却処分あるいは開墾することに対して慎重にならざるをえないのは当然である。そのため西代神社は、売却・開墾どちらを行うにしろ「仲哀天皇陵」、「高向王墓」にかかわらず陵墓との関係の明確化を関係官庁に上申<sup>㉔</sup>したのである。

大阪府に提出された1912年（明治45）2月5日付の伺書は、その10ヵ月後の1912年（大正元）12月17日付で宮内大臣宛に上申された。その間、西代神社は回答がないため、同年12月16日付で「至急何分之御指令」と「御伺書」を再度提出している。この文書の大阪府の受付は宮内大臣への上申日の翌日12月18日付となっている。大阪府は更に12月20日付で南河内郡長に対し「古墳墓二関スル件」として、西代神社に対し「目下其筋へ照会中」と回答するよう指示している。しかし、結局、宮内大臣からの指令はすぐには届かなかった。

回答が示されたのは、2年後の1914年（大正3）になってからである。

大正元年十二月十七日附庶甲第一五 号ヲ以テ南河内郡長野町大字上原元村社西山神社境外古墳墓ノ伝説アル地所売却若クハ開墾セシムルモ差支無之哉指示相仰度旨当省大臣へ上申相成候処右処分二関シテ八当省ヨリ指示スヘキ限り二無之候得共同地八御陵墓ノ関係ヲ認メス候二付右様

---

㉔ 以下の引用する文書は㉔に同じ。

御承知ノ上可然御取計可相成大臣ノ命ニ依リ此段申進候也

大正三年四月十五日

諸陵頭理學博士山口鋭之介

この回答文書によれば、古墳墓の伝説ある地は「陵墓ノ關係ヲ認メス」と判断されたのである。しかし、陵墓以外の古墳と認めた指令もなされていない。

それは、「太政官達第59号」、「宮内省達乙第3号」が、古墳や古墳とおぼしきところでの自由な開墾や発掘を禁じ、古墳の不時発見等の届出をうながしているところによる。この元西山神社の場合は古墳状の高まりがあり「口碑流传ノ場所」であるところから「太政官達第59号」にもとづき、西代神社からの伺書が提出された。

古墳の不時発見などの対応については、1915年（大正4）1月19日に南河内郡役所から大阪府内務部長宛の報告で、同じ長野町高向でミカン畑開墾中に古墳が発見された例<sup>⑤</sup>がある。この場合、宮内大臣宛に「古墳ニ関スル件」として「石蓋ガ露出」したとの報告が行われている。この場合の事務処理は早く、同年2月17日には宮内大臣宛の報告がなされ、翌3月24日には宮内省からの指令が出ている。この指令は宮内省名で「古墳ト認ム但シ陵墓ノ徴証ヲ認メス」と判断されている。

### 3、陵墓、非陵墓、未選別古墳

このように、明治期における古墳保存は、陵墓行政によるものである。陵墓行政上すべての古墳は、陵墓古墳か「陵墓ト認メス」とされた非陵墓古墳に選別される。しかし、「太政官達第59号」、「宮内省達乙第3号」の通達があるように、陵墓行政では現実的に、すべての古墳を調査し選別するのは不可能である。結局、通達を遵守した地方庁からの個々の届出によって順次古墳を選別してゆく方法しかないのであった。

---

⑤「自大正二年至大正五年 官祭招魂社及墳墓 第26号古墳墓ニ関スル件報告」『陵墓関係 大阪府廳文書 御陵墓願伺届 七』宮内庁書陵部 1935年（昭和10）写

しかし、政府は天皇陵だけでなく明治4年(1871)4月24日太政官布告「后妃皇子皇女等御陵墓」の取り調べを府藩県に命じた。また1878年(明治11)10月9日「二世親王内親王御墓取締方措置」がだされている。更には1881年(明治14)1月9日宮内省達乙第1号では府県に対し「古来諸王ニテ奉祀ノ子孫無之方々ノ墳墓」の取り調べが命じられた。このように選別すべき陵墓の対象が無限大に広がっていった。

結局、全国にある古墳は陵墓古墳、非陵墓古墳、まだ調査も選別もされていない未選別古墳に大別され、その中でも未選別古墳が大部分を占めることになる。その未選別古墳から大日本帝国憲法発布までに治定された全天皇陵(後に南朝長慶天皇の在位が認められ陵墓が決定される<sup>⑧</sup>)を除く、皇后以下の陵墓を選別しなければならなかった。

このような背景の中で、近代神社が、近代天皇制国家の中で国家祭祀を掌るものとして位置づけられ、皇祖の神霊、国家の功臣を祀るべきものであることから、陵墓伝承、古墳伝承地の取り扱いを慎重にならざるをえなかったと考えられる。

このことから、西代神社もまた、元西山神社跡地について売却あるいは開墾しようとして、陵墓伝承地の取り扱いに苦慮したのである。

## まとめ

江戸時代延宝期から元禄期に幕府によって仲哀天皇陵とされた場所は、享保期頃から仲哀天皇陵が否定され、変わって高向王墓説が浮上してきた。そして、文久の修陵において、仲哀天皇陵は岡ミサンザイ古墳に治定され、上原村の仲哀天皇陵は公式に否定された。また、仲哀天皇陵の構成要素であった仲哀天皇を祀った社や八幡宮が、元禄期以降、氏神として整備され、それぞれが信仰対象となってゆく。

---

<sup>⑧</sup> 1926年(大正15)10月21日に皇統加列の詔書、1944年(昭和19)2月11日嵯峨東陵を決定。

明治維新後、近代神社制度が整備されてゆく中で、西山神社の名称がつけられ、その境内地内にある被葬者が不明な「陵」あるいは「高向王墓」として認識された。しかし社寺領上知令と地租改正により、この「陵」あるいは「高向王墓」は、周囲の山林とともに一括境外地として上知処分された。その後、神社に更に払い下げた。この西山神社も合祀されたことにより、当該地は神社跡地と「陵」あるいは「高向王墓」とされた場所は「古墳二似タル所」と位置づけられるに至った。

このような変遷を経た場所が、売却あるいは開墾などの処分が予定されることになり、そこに陵墓行政による判断と許可が必要となった。それは、古墳か否かという判断よりも陵墓であるか否かの判断である。もちろん仲哀天皇陵ではないのであるが、高向王墓説など他の被葬者の陵墓である可能性は残されていたからである。結果、最終的には宮内省から非陵墓と認定されたことで、行政手続き上この土地を処分することが可能になった。

古墳の保存は、1919年（大正8）の「史蹟名勝天然紀念物保存法」の制定により史蹟指定という新たな保存施策が実施されるまで、陵墓に関係するか否かによって大きく変わった。つまり、陵墓治定を取消あるいは改定された一部の古墳を除いて、非陵墓古墳とされた古墳は行政上保存措置をとることはなかった。

この一連の経緯は、近代天皇制国家成立過程の中で行われた神社制度や社寺領上知令など行財政制度により、江戸期以来地域で守り伝えられてきたものが崩壊する過程でもある。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、石川唯氏、鎌田和栄氏、上原自治会、河内長野市史編集室には多大な協力を賜り、記して感謝いたします。

また、松永俊男先生には、本学での後輩指導の機会を与えていただくなど親しくご指導賜りお礼もうしあげます。